

研究ノート

朝鮮の党争と仁顯王妃

李 文相*1

キーワード：士林派、勲旧派、党争、四色党派、換局政治、仁顯王妃

はじめに

歴史ドラマ「長今の誓い」(イ・ビョンフン監督)を皮切りに韓国の歴史ドラマは朝鮮時代の宮廷文化や権力闘争、そしてそこにまつわるある種の浪漫などが日本の視聴者に好奇心を呼び起こしている。

本稿は朝鮮時代に党派間の争いが特に激しかった17世紀末に王権強化のため度々政局の転換を図ったとされる第19代王肅宗(スックチョン)ⁱの時代(1674~1720)に的を絞り、その換局政治(ファングクチョンチ)と呼ばれる政局転換の狭間で翻弄されるように生きた仁顯(イニョン)王妃の人生の内面を知ることによって当時の世相の真実を探ろうとするものである。

現在残っている宮中文学の中に、肅宗王の継妃となった仁顯王后(1667~1701)ⁱⁱを主人公にした小説風の作品がある。この作品は作者未詳であるが、その内容から判断して、仁顯王妃に仕えていた宮人の筆によるものとされている。また、書かれた年代も定かではないが、第22代王正祖時代(1776~1800)になってから記されたものとされている。ということは、仁顯王妃が亡くなってから75年も後のことであり、仁顯王妃が生存していた当時の歴史的事実や仁顯王妃の会話など書き留めていた内容をその後も長年にわたり政治権力の影響を恐れて公表できなかったものと推測されよう。

しかしそのことを踏まえても、この作品は仁顯王妃側の立場に立って書かれた一編の小説であり、仁顯王妃の心情に迫ることはできると思われるが、いろんな場面で脚色されていることが考えられるので真実の理

解に疑問が残る。

したがって、本稿ではこの『仁顯王后傳』を『朝鮮王朝実録』と比較しながら王妃の生き方の内面に焦点を当て、そのことによって当時の世相の真実をできるだけ明らかにしてみたい。

1 朝鮮の王妃と後継ぎ

儒教を国教としていた朝鮮時代(1392~1910)、男尊女卑の社会の中でも王妃の座は、女性の中で最高の権力と栄華を手ででき実家の社会的地位を一挙に上げることを可能にした。王妃の座を確実にする最良策は世子(跡継ぎ)を生み、その子が王位継承の王世子となり、そして最終的に王位に就くことである。

1680年、西人派ⁱⁱⁱの家系に生まれ第19代肅宗の継妃となった仁顯王妃の閔氏は、徳望が高い家系に生まれ彼女は国母として民衆から信頼と尊敬を受けたのであるが、残念なことに跡継ぎが生まれなかった。そのため、王の寵愛を受けて側室となった南人派^{iv}の張氏^vから跡継ぎが生まれると、王妃の立場は一挙にどん底に落とされる。王妃の座を狙う張氏は王の寵愛を武器にしてさまざまな陰謀をめぐらす。そのため王からも疎まれるようになりその結果1689年、閔氏は廢妃にされた。実家に戻されてからは罪人暮らしのまま六年間辛うじて命をつなぐぎりぎりの困窮生活を強いられた。

張氏が王妃に昇格すると、以前の庚申換局^{vi}によって失脚した南人派は、張氏の権勢を利用して朝廷の政権を握るようになり、それまで実権を握っていた西人派を配流、処刑に処すなどで政界から西人派を一掃したのである(己巳換局^{vii})。

*1 山口福祉文化大学 ライフデザイン学部

しかしその後、次第に冷静さを取り戻した肅宗は、張氏の度を越す勝手気ままな振る舞いを不愉快に思うようになると愛情も冷めるようになる。一方、長年にわたり辛酸を舐めながら暮らしている廢妃閔氏のことが気がかりだった。そんな状況のときに、廢妃閔氏の王妃復位運動が密やかに行われていることを南人派からの通報で知ることになる。

その運動は西人派が推進しており既に民衆にも波及していることを知った肅宗は、人徳と礼節を兼ね備えた閔氏を廢妃にし、出宮させたことに対して心から反省し王妃を復位させるために許しを請う形の文書を書いて何度となく使者に持たせるのである。しかし廢妃閔氏は、その都度憤み深い態度で自分は罪人であるということで王命を二度、三度と繰り返し辞退するのであった。

そういう状況ではあったが、結局は王命を受けて閔氏は復位した。すると今度は南人派が酒配流、処刑される立場となり、朝廷は西人派が実権を掌握するようになる。（甲戌換局^{viii}）

そして八年後、王妃は実家で強いられた困窮な生活が災いして酷い痘瘡を患い病弱の末 35 歳で世を去った。自責の念に駆られていた肅宗は、別途王子を生んだ淑嬪崔氏^{ix}の知らせで張氏が宮殿の中に神堂を作り巫堂を呼び寄せて閔氏の死を呪詛する儀式を行っていたことを知る。憤慨した王はその事実を張氏に突きつけて賜薬（毒薬による死）が下されて死ぬ。

以下、2では肅宗の換局政治と時代背景について、3では『仁顯王后傳』の作品紹介と『仁顯王后傳』の中から、党派争いに翻弄された王妃の生きざまについて述べるとともに、第19代王肅宗の換局政治の中で王妃がどのように生きなければならなかったか、そして朝鮮王朝時代の政治のあり方について私の見解を述べて締めくくりとする。

2 換局政治と時代背景

「換局(ファングク)」とは政局の転換を意味する。

肅宗は「換局政治」で王権を強化しようとしたのである。肅宗は3回政権を交代させて朋党間の対立を誘発させ、その見返りとして忠誠を強いる手法を用いた。つまり、肅宗は党争を煽った王でもあった。

第19代肅宗(在位期間1674-1720年)時代は、朝鮮中期以来続いた朋党政治が、第18代顯宗(在位期間1659-1674年)以後の礼訟論争^{xi}で朋党政治それ自体が破綻し始めた時期であった。1680年の「庚申換局」で礼訟論争は一段落するが、西人派はこの時の南人派の弾圧をめぐって内部で意見が対立し、宋時烈^{xi}を中心とする老論派と韓泰東を中心とする少論派に分裂した。このように朝廷は、南人派、北人派と共に老論派と少論派が割れて四色朋党を形成するようになった。

西人派は分裂以後、老論派が政権の主導権を握っていたが、1689年、老論派と少論派がともに南人派の宮女で側室になった禧嬪・張氏が生んだ王子が王の跡継ぎである世子になることに反対したために起きた「己巳換局」で政権を追われ、実権は再び南人の手に移った。

仁顯王后の閔氏は、このとき廢妃にされて実家に帰り貧困な罪人暮らしを始める。そして張氏は王妃へと昇格し、朝廷は張氏の兄の張希載を中心に南人派が主導権を握り権勢を振るようになった。その後、西人派は、老論・少論共に閔氏の王妃復位運動を進めていた。

この運動を探り当てた南人派は王に知らせるが、肅宗王は日頃から持ち前の性格と世子を生んだことで政治に出過ぎた口出しをする禧嬪に嫌気がさしており彼女に対する愛情も冷めていた頃だったので、当時権勢を振るっていた南人派を牽制することにしたのである。

1694年に起きた「甲戌換局」は、西人派を完全に追放する計画を立てていた南人派が逆に失脚する事態となった。このとき廢妃とされていた閔氏は復位し仁顯王妃となる。

一方、張氏は王妃を降格させられ、禧嬪・張氏に戻され住まいも元の就善堂に戻された。

ところが、その後も彼女は執拗なまでに権力欲にと

りつかれる。1701年、禧嬪・張氏に関連して起きた「神堂事件」^{xiii}によって、肅宗は禧嬪・張氏に賜薬を下し、彼女の兄・張希載、その家族をも拷問の末処刑した。

この事件で肅宗は1716年、少論派を排除し老論派を重用した。そして翌1717年、老論派に対し、世子が病弱な上に子がつくれないことを話し、淑嬪・崔氏から生まれた延祚君(ヨニングン・英祖)を後嗣に定めることと、彼を世子代理聴政にすることを命じた。

ところが、病弱な世子を支持する少論派と延祚君を支持する老論派との間で党争が先鋭化する。1720年、肅宗の後を継いで景宗が即位したが、老論派は景宗の健康問題を理由に王位継承者問題を申し立てた。景宗は翌年、少論派の反対にもかかわらず老論派の主張通りに淑嬪・崔氏の子・延祚君を世弟に決めた。するとその2ヵ月後に老論派は続いて代理聴政を行わせるべきだと新たな要求を申し出る。度重なる要求に少論派は王権を保護する名分で反対したのであるが、景宗は自分の健康問題から世弟聴政を一旦受け入れたが、再びこれを取り消すなど政局は混迷を深めた。

景宗は13歳の時、母親が自決させられたことを悩みずっと病気がちだった。この件以後に少論派は没落し、老論派が勢力を得るようになる。そして党争が激化する最中の1721年12月に金一鏡ら7人が「王朝交替を企てた謀反に当る」という内容で上疏した結果、老論派の四大臣が免職となり配流された。これを「辛丑獄事」と言う。

こうして少論派が朝廷を掌握するようになると、少論派の強硬論者たちが老論派の粛清に乗り出し、南人派出身の睦虎龍を利用する。1722年、睦虎龍が少論派の意向に沿った告発書を提出した。その告発の内容は、景宗が世子の時に殺害を謀議していたというもので、事実を誇張した内容だった。その陰謀に加担した者たちは老論派の免職された四大臣の息子や甥やその他の追従者たちだった。これを「壬寅獄事」と言う。

1721年の辛丑の年と1722年の壬寅の年に続けて起こった二つを合わせて「辛壬獄事」とも言う。この獄

事で処断された者は、罷免された四大臣が新たに自決を命じられたほか、死刑20余名、拷問死30余名、配流114名、自ら命を絶った婦人9名、連座した者173名等が記録されている。そして「辛壬獄事」の後、政権は少論派が独占するようになる。

1724年、景宗が病状悪化で死去し、その後の第21代王に英祖が引き継ぐ。老論、少論の熾烈な党争の狭間で王位についた英祖は、即位するとまず、朋党の弊害を列举し、器の水が均等になっている様子を表す「蕩平(タンピョン)政治」を掲げて不偏不党を貫くことにする。

しかし、自分を苦境に立たせ多く的大臣たちを死に追い込んだ「辛壬獄事」に対する責任を追及することとし、英祖は少論派の金一鏡と南人派の睦虎龍を処刑するなど、辛壬獄事を引き起こした関係者を粛清し、その時の同調者も島流しにした。

その後も老論派は少論派に対し相次ぐ弾劾要求を繰り返すが、英祖は人材を公平に登用する「蕩平策」の立場からこれに反対し、政治的報復につながる人事を避けて人材中心に王権を固めていった。そして、蕩平政治の構図に従って老論、少論、南人、小北の四色党派を均等に登用していくのである。

3 『仁顯王后傳』の作品概要と解説

『仁顯王后傳』の始めには仁顯王妃の幼い時の姿が概略次のように記されている。

花月が恥ずかしいと思うほど容貌が美しく気立てが優しく裁縫の手裁きも上手で心遣いが常に同じく喜怒哀楽を顔に出さぬ。性格が有閑で人徳があり、親孝行で人となり謙虚であり、あらゆる面に秀でて一日中丹精に座っている姿が柔らかく、春の日向のようである。両親を含め遠近の親戚全員から大事に思われ、愛され、小さいときから羨ましがらない人がいないくらい花のような香名が広く知れ渡っていた。早くに母を亡くし、悲しみながらも継母に孝行し、外祖父は彼女を見て「国母としての徳望がある」とおっしゃった。

朝鮮時代の第19代王肅宗は第1王妃の仁敬王妃が跡継ぎを生むことなく三十という若さで亡くなり、その継妃として西人派の家系の閔維重の娘と婚姻した。この人が仁顯王妃である。仁顯王妃には跡継ぎが生まれず、跡継ぎのため当時王の寵愛を受けていた張氏を側室として受入れ嬪の職位を与えた。

この張氏からは跡継ぎが生まれたので、張氏に対する王の寵愛ぶりは尋常でなかった。こうなると張氏の側の南人派が権勢をもつようになり、張氏は閔氏（仁顯王妃）を廢妃して自分が王妃になるためのあらゆる陰謀を画策する。張氏の話であれば何でも耳を傾ける王は次第に理性を失うようになっていく。

そのような中で、閔氏は廢妃にされて実家で暮らすよう命じられる。廢妃となった閔氏は実家で生命を維持するぎりぎりの貧困生活を強いられる。

次第に理性を取り戻した王は、閔氏を廢妃したことを悔やむようになり、六年後に閔氏を宮殿に呼び戻し再び仁顯王妃として復位させたのである。

しかし、仁顯王妃は実家で貧困を極め病弱な体になっていた。その上、宮殿では王妃から嬪に降格された張氏によって命が危険に晒されるようになる。それは、張氏が住む就善堂の西側の一室に神堂を設け巫堂（シャーマン）を呼び寄せ、仁顯王妃が早く亡くなるよう呪詛の儀式を挙げていたことが公になるほど呪われており、実際に仁顯王妃は次第に病気がひどくなりとうとう世を去ったのだった。

『仁顯王后傳』の中では、王妃の死後、王妃を恋しく思いながらうたた寝をしていた王は王妃が現れた夢を見る。夢の中で王妃は呪詛の儀式を行った神堂のことを王に告げる場面が出てくる。

しかし、『朝鮮王朝実録』では、王は淑嬪崔氏によりそのことを知らされたことになっている。張氏は結局賜薬（毒薬）で処刑されている。

『仁顯王后傳』は、1680年に肅宗王の仁敬王妃が亡くなり、15歳で西人の閔氏から継妃として迎え入れた仁顯王妃のことを記した作品である。肅宗王はそれま

で、莊烈王妃趙氏（慈懿大妃）^{xiv}のそばで使っていた宮女の南人派中人階級出身の張玉貞を寵愛していた。王より2歳年上の張玉貞に夢中になった肅宗王は、6歳年下の礼儀正しい仁顯王妃に対し始めはあまり関心を示さなかったといわれる。しかし母・明聖大妃^{xv}の意思によって張氏が遠ざけられたので、肅宗王は次第に賢明な仁顯王妃に愛情を移すようになった。

ところが、明聖大妃の死後、張氏は再び宮中に呼び戻された。その頃の朝廷は西人派が朋党を作り権勢を振るっていた。そのため、肅宗王は西人派と対立する南人派を重用する方針をとり、そのような状況の基で南人の張氏に夢中になっていくのである。このことを諫める西人派の多くは政界を追われる（己巳換国）。

肅宗は張氏に王子が生まれて100日も経たないうちに世継ぎの世子にした。仁顯王妃がまだ若いので時期尚早であると諫めた西人派の重鎮たちは島流しにされ、朝廷から追い出された。このとき西人の巨頭として有名な宋時烈^{xvi}も王命により命を落とす。

張氏の陰謀で罪に問われた仁顯王妃は廢妃にされて宮殿から実家に戻され罪人暮らしを送るようになる。

仁顯王妃は徳望の高さから、嬪張氏からの中傷や陰謀によって廢妃とされながらも清らかな心持ちで王様を恨む気持ちは少しも抱いていなかった。

一方、世継ぎである王世子の母として王妃になった張氏は、本性のままに振る舞い周りに対してぶしつけない言動を吐き続けた。朝廷の中は彼女の言いなりになり、彼女の兄・張希載も朝廷内外で横暴に振舞った。張氏の取巻きの南人が権勢を振るうようになると肅宗王は仁顯王妃を廢妃にしたことを悔やみ始め、王妃の復位運動に心が傾いていく。

実家で命ぎりぎりの生活を六年間おくったが、やがて西人派によって廢妃復位運動が展開された。民衆からも王と張氏を風刺した歌^{xvii}の流行や、関連する内容の『謝氏南政記』^{xviii}の流布などもあり、王は廢妃にした王妃を恋しく思うようになりついに復位させ宮中に呼び戻す。しかし既に病弱だった王妃は35歳という若

さで亡くなり、それを心から悲しむ王の様子なども描かれている。国母として民衆から尊敬を受けていたが、仁顯王妃には子どもが生まれなかった。慈悲深い心で嬪嬙張氏の息子^{xix}や崔氏の息子^{xx}を愛し、自分を陥れた張氏とも和睦の心で接していたとされている。

世継ぎとなる王世子の母として王妃まで上り詰めた張氏は何事にも口出しをし、わがままに振る舞う。王が他の側室を尋ねるとぶしつけな言動をあらわにし、王の子を身ごもった宮女を虐待し、それを王に目撃されたこともある。

朝廷から締め出された西人派は、ひそかに廢妃の復位運動を展開するようになりそれが民衆の心を集めるようになる。肅宗と仁顯王妃と張氏を風刺した内容の『謝氏南征記』の冊子を民衆に流布させたり、肅宗の張氏に対する愛が終わり仁顯王妃が復位されるということをはのめかす内容の歌を子どもたちに歌わせることで広まっていった。

西人派の活躍で肅宗の元にも『謝氏南征記』の漢訳本（同派の金春澤の訳）が届くようになり、王は深く反省する結果となるのである。

やがて、肅宗は仁顯王妃を復位させて西人派を登用することになる。そして復位した仁顯王妃は張氏との和睦を試みるのであるが、張氏は秘密裏にシャーマンの巫女を宮内の一室に招き入れて病弱な仁顯王妃が早く死ぬようにと呪詛する儀式を度々行う。

肅宗は、自分のせいで廢妃の生活を送ることになりその中で病弱した仁顯王妃の体を治すために全力を尽くす。しかし治癒することなく仁顯王妃はわずか 35 歳という若さで世を去る。王は悲嘆のあまり、葬儀のとき涙ながらに長い弔辞を述べたのである。

作者は未詳だが、仁顯王妃に仕えていた宮人が第 22 代の正祖の時代になって記したものとされる。

このほかに宮中文学の代表的なものとして『癸丑日記』^{xxi}、と『恨中録』^{xxii}がある。それぞれの作品からも、四色党派間の党派争いに巻き込まれ陰謀や謀反に陥れられて窮地に立たされる王妃たちの悲痛な息遣い

が聞こえてくる。

終わりに

西人派の閔氏は肅宗と婚姻し継妃となる。彼女が仁顯王妃である。そして張氏の陰謀に陥れられて廢妃されるが六年後に復位される。

一方、肅宗が寵愛してやまなかった張氏は王妃への昇格と数年後の嬪嬙への降格、そして最後は賜薬（死薬）を飲ませれて死ぬことになる。

1392 年に高麗を倒して建国した朝鮮王朝は、初期から勲旧派（王族の戚臣や功臣たち）の勢力が大きかった。弱化する王権強化のために儒学者を要職に登用した第 9 代王の成宗や第 14 代王の宣祖の例もあるが、第 19 代王の肅宗は度々換局政治を用い王権強化を図ることで政治の安定を保ってきたのである。

人生の末路は古今東西だれにもわからないものであるが、朝鮮の党争に巻き込まれる時代を生きた王妃こそ、天国と地獄を何度も行き来するほど翻弄される人生を生き抜く必要があった。周りでは多くの人々の処刑や配流がありその都度政局が入れ換わる。勝者がいつ敗者となり、敗者がいつの間にか勝者となって政権側に就くこともある。敗者復活戦があるのが朝鮮時代の面白さかもしれない。そこには命を賭ける男の浪漫があり、羨望と落胆と嫉妬から逃れられずに葛藤する女たちがいた。

本稿では王妃の生き方を宮廷文学と位置づけられている小説風の『仁顯王后傳』と『朝鮮王朝実録』から王妃たちの心の内面を探り、その時代の世相や党争の実像に迫ってみた。

[引用・参考文献]

(韓国国内出版図書)

- 1) 구인환; 仁顯王后傳, 신원문화社, 2003
- 2) 肅宗実録(解題), 世宗大王記念事業会, 1988
- 3) 朴永圭; 한권으로 읽는(一冊で読む)朝鮮王朝実録, 図書出版늘녘, 1997

4) 유승환 ; 한권으로 읽는 (一冊で読む) 朝鮮王妃列伝, 글러북스, 2009

5) 金井孝利 ; 韓国時代・歴史大辞典, 明昌堂, 2011

[註]

ⁱ 顯宗の一人息子。母は明聖王妃金氏。1661 年出生。名前はスン。7 歳で王世子に冊封され、14 歳に即位。

ⁱⁱ 閔維重の娘。1681 年（肅宗 7 年）、婚姻し継妃となる。

ⁱⁱⁱ 1567 年第 14 代王宣祖は 15 歳で即位し、翌年 16 歳で親政した。宣祖は性理学的王道政治の信奉者で、政界の勲旧、戚臣勢力を全て追放し士林の名士たちを大挙登用した。そして、性理学の巨頭と称された退溪・李滉（トエゲ・イ ファン）と栗谷・李珥（ユルゴック・イ イ）を国師として待遇した。1575 年に士林派が東人と西人に分裂し、理念を異にする朋党時代が始まった。東人派は李滉の弟子たちで嶺南学派と称され、朱熹の人間性に着目し理気二元論を主張した。西人派は李珥に従う人たちで畿湖学派と称され、朱熹の説を合理的に解釈する主気哲学を主張した。

^{iv} 1591 年、宣祖が 40 歳を過ぎても世子を決められなかった問題について意見を述べた鄭澈は、李山海の計略に嵌められて失脚する。この時、東人は西人を大々的に肅清した。言うなれば、東人が鄭汝立謀反事件の報復をしたことになる。以後、東人は南人と北人に分かれ、仁祖反正までの 30 余年間、分党を繰り返しながら執権を続ける。

1591 年に東人が分党した理由は、西人を肅清する裁判の過程で意見が割れたからであった。北人と南人は共に主理論を主張する同じ嶺南学派だが、対立

要因は人脈の違いによるものだった。分党の直接のきっかけは鄭澈に対し、死刑などの強行処分を主張する李山海と、配流など穏健な処分を主張する禹性伝との違いにあった。北人の呼称は、李山海の家が漢江の北にあり、彼に追従する李滉の家が北岳山のふもとにあったことに由来し、南人の呼称は、禹性伝の家が南山のふもとにあり、彼に追従する柳成龍が嶺南出身であったことに由来する。

^v 1659 年出生、1701 年没。19 代王肅宗の嬪として第 20 代王景宗の母。肅宗より 2 年年上で本名は張玉貞という。父親は訳官出身の張炯で母親は張炯の側室の尹氏。

^{vi} 1674 年に顯宗が死去して第 19 代王肅宗が即位した時、禁止されていた礼訟問題を西人老論派の宋時烈が再び持ち出した。その結果、彼は配流されて南人派が政権を掌握。西人派の勢力は急速に衰えた。ところが、その後、成均館を中心とする儒生たちが宋時烈の主張は正当だと訴えて釈放運動を展開する中で、南人の謀反事件と重なり今度は南人派が大挙肅清されて西人派が実権を奪還した。礼訟論争が一段落したこの事件を「庚申換局(キョンシンファングク)」と呼ぶ。

^{vii} 王子の世子冊封問題により南人派が政権掌握。

^{viii} 1694 年、仁顯王妃の復位により南人派が失脚、西人の少論派が執権。

^{ix} 7 歳の頃から宮中で掃除や水汲みなどの下働きをしていた宮女で、仁顯王妃が廃妃された後、毎日復位を祈っていたといわれている。肅宗はその心に打たれ、側室に迎えたとされる。

延仍君(後の第 21 代王英祖)を生んだ。

^x 第 14 代王宣祖（在位期間 1567-1608 年）の時代に

なると、第11代王中宗が試み半ばで終わった勳旧勢力や戚臣政治の排斥し士林勢力が登用した朋党政治が本格的に到来する。朋党は対立する相手と共存しながら意見を統合させる特徴がある。また、党争の本質は一党独裁を防止するところにあるので現代の民主主義に根ざした政党政治と同様だとも言える。

^{xi} 礼訟論争は表面的には王室の典礼問題であるが、実質的には主気論をとる西人派と主理論をとる南人派とが、礼を最高の徳とする性理学を中心とする理想国家建設の理念闘争である。それは朝鮮後期の朋党政治における自党の正当性をめぐる命懸けの戦いだった。

^{xii} 西人派（分党以後は老論）の領袖で、西人派を統合し指揮していた。仁顯王後の父親の閔維重を始め兄たちは宋時烈の門下生であった。

^{xiii} 張氏は就善堂の西側に神堂を設けてシャーマンの巫女を呼び、占いをして毎日のように仁顯王妃の死を祈り、自分の復位を図っていた。実際に王妃が死んだため、この神堂問題は収拾できないほど大きな政治問題として拡大してしまった。

^{xiv} 第12代王仁祖と14歳で婚姻した王妃。

^{xv} 肅宗王の母。彼女は10歳の頃、第18代王顯宗と婚姻し次第に政治に関わるようになった。

^{xvi} 西人派（分党以後は老論）の領袖で、西人派を統合し指揮していた。仁顯王後の父親の閔維重を始め兄たちは宋時烈の門下生であった。

^{xvii} 老論派の金春澤が叔父金万重の作詞した「四季緑色の芹は緑でいつまでも鮮やかな緑、春だけ咲く

菜の花はもうすぐ散るだろう。菜の花の周りで遊ぶ蝶も季節が過ぎると来ないだろうに、そうなったらどうする？ そうなったらどうする？」という歌詞に歌い易い節をつけて子供たちに歌わせたのが広く流布したものである。四季緑色の芹を仁顯王妃にたとえ、菜の花の散る運命を張氏になぞらえた。

^{xviii} 張氏の子供を元子に冊封し仁顯王后が廃妃にされたとき、それに異を唱える上訴をして配流となった金万重が肅宗王と仁顯王妃と張氏との関係を別の物語風に描いた小説作品。

^{xix} 1688年に昭義に昇格した張氏は肅宗王待望の長男昀(ユン)を出産した。その子が第20代王景宗(在位期間1720-1724)である。

^{xx} 延仍君。異母兄の第20代王景宗が健康に恵まれず世継ぎがいなかったため、1721年に世弟(王の弟に当たる王位継承者)になった第21代王英祖。

^{xxi} 実家が西人派であった仁穆(インモク)王妃(第14代王宣祖の継妃)の西宮での監禁記録。1608年宣祖が崩御すると光海君を推す大北派側は陰謀によって王妃の父親や兄弟を反逆罪として殺し、幼い息子まで引き離されて殺した。以後10年間、西宮での監禁生活で命ぎりぎりの受難生活を余儀なくされる。作者は宮中内の宮女とされているが未詳。全体的に仁穆王妃の立場に立った内容になっており仁穆王妃本人が書いたという説もある。仁祖反正^{xxi}により光海君は王位を退けられて江華島に配流されたが、立場が逆転した仁穆王大妃は生き残った娘と娘婿を頼りに王宮内で王大妃として君臨する。

^{xxii} 思悼世子の妻の恵嬪洪氏^{xxii}の自叙伝。老論派の娘だった恵嬪洪氏は1744年、9歳のときに第21代

英祖の一人息子で同じ年の莊獻世子（死後「思悼世子」と称す）と婚姻し宮殿入りした。日々莊獻世子と過ごした期間や、1762年に莊獻世子が死亡した後は息子のイサンが王位に就いた。その後は老論派の

重鎮だった実家の父や叔父が糾弾される羽目になるが、そのときの恵嬪洪氏の思いがつづられている宮中における記録。